

■八木秀次 やぎひでつぐ 帝国大学始・1886＝	電氣工学者。“八木アンテナ”を発明するも無視されるが、イギリス軍の戦利品にあって、一気に評価。 大阪十人両替の一軒ながら、維新後に没落した老舗(札差)の三男に生まれる。
帝国憲法発布1889＝ 3歳：	
日清戦争始・1894＝ 8歳：	父の蕩尽を見かねた母により、
日清戦争終・1895＝ 9歳：	家督を相続、 10年上で株屋に奉公に出ていた長兄の援助を得て就学、
Bushidou・・1899＝13歳：	父が死去、
日比谷公園・1903＝17歳：	大阪府立北野中学校時代から、数学嫌い、同人雑誌作って句作や新体詩に打込む文学少年であったが、
日露戦争始・1904＝18歳：	産業界で身を立てようと、第三高等学校第二部(理科)甲類に入学。 この年始まった<日露戦争>に際して、日本海軍は発明されて間もないマルコーニの無線電信方式を他国に先駆けて採用し、改良装備して勝利に大きく貢献し、世界中が採用することになる。
日露戦争終・1905＝19歳：	
満鉄発足・・1906＝20歳：	東京帝国大学電氣工学科に入学、新任助教授鯨井恒太郎から無線の面白さを教えられ、電氣試験所で無線研究に取り組んでいる先輩のところに出入り、与謝野晶子の実兄ながら義絶した鳳秀太郎教授から研究の面白さを教えられて、産業界への就職を取りやめ、その紹介を受けて、
伊藤博文暗殺1909＝23歳：	5番で卒業後、仙台高等工業学校に就職(上位4人は何れも大手電機会社)、兵役短縮のため志願して入隊、
韓国併合・・1910＝24歳：	除隊とともに復帰して、教授となる。
大逆事件判決1911＝25歳：	この年、電氣試験所のメンバーが世界で初めて実用的レベルで電波に人間の声を乗せることに成功する。
明治天皇没・1912＝26歳：	前年発足した東北帝国大学理科大学に移管されて工学専門部教授となると、物理学科へ頻繁に出入り、
大正政変・・1913＝27歳：	命じられてヨーロッパに留学、ドイツのベルリン工科大学で学ぶうち、現地では重電より弱電の方が重んじられていることを知って、ドレスデン工科大学に移りG・H・バルクハウゼン教授に師事したが、
第一次大戦始1914＝28歳：	<第一次世界大戦>が勃発してイギリスに逃れ、真空管の発明者ロンドン大学J・A・フレミング教授に学び、実験を成功させて論文を発表するなど実績を上げ、無線通信工学分野の将来性に確信を抱くとともに、アルバイトでウェーラーらに日本語教授するなどするうち、空襲が激しくなり、
21ヶ条要求・1915＝29歳：	アメリカに移動して、
民本主義・・1916＝30歳：	帰国した。 この間、本多光太郎率い俊秀集まる東北帝国大学理学部は世界の学者から一目を置かれるようになる。
べル仁条約・1919＝33歳：	結婚。この年、ウェーラーが、日本文学最初の英訳「Japanese Poetry The 'Uta'」を出版。 ★東北帝国大学工学部設置とともに電氣工学科教授に就任、理工間の壁の打破に腐心し、科員が学会誌を独占するほどに。
大暴落・・・1920＝34歳：	長男が誕生。
原敬首相暗殺1921＝35歳：	
水平社結成・1922＝36歳：	
護憲三派圧勝1924＝38歳：	仙台で会社経営する資産家の斎藤善右衛門から多額かつ無償の寄付を受け、精力的に研究を進めるうち、
治安維持法・1925＝39歳：	工学部長に就任した年、助手が実験中、波長計の位置で電波の強弱が変化することを報告、 この年、ウェーラーが源氏物語全訳の出版を開始。母が死去。 *「短波長電波の発生」「短波長による固有波長の測定」等の論文を発表、それに基づき、超短波用指向性アンテナの基本となる“電波指向方式”を発明。
円本時代始・1926＝40歳：	特許を取得、国内では無視されるなか、以後、弟子の宇田新太郎が実用化に向けた研究に取り組む。「電氣通信共同研究綱領」を作成して、大学研究を主導。 翌年にかけ欧米出張し、学会等で発表するや大反響、日本人初のIRE(無線技術者学会)フェローとなる。 以降、東北帝大工学部に電氣通信研究所の設置を文部省に申請し続ける。
金融恐慌・・1927＝41歳：	
世界恐慌・・1929＝43歳：	
満州事変・・1931＝45歳：	
五一五事件・1932＝46歳：	宇田が学士院御成婚記念賞を受ける。
国際連盟脱退1933＝47歳：	本多に推されて新設の大阪帝国大学理学部教授を兼任、学的な研究が侮蔑される環境に苦勞しながら体制を構築、京都帝大で悶々としていた湯川秀樹を受け入れ、
帝人疑獄事件1934＝48歳：	あまりに革新的なテーマに没頭して論文を書けずにいた湯川を叱責、初めての論文「中間子論」をまとめる契機になり、坂田昌一・伏見康治・武谷三男など錚々たる人材が結集する。この間、東北帝大は研究方針の全く異なる抜山平一が学科を取り仕切るようになって、足が遠のき、 ついに阪大専任となる一方、関西財界を説得して谷口工業奨励会から多額の寄付を獲得し、 阪大にサイクロトロンを完成させて、世界をリードする研究機関として行く。
二二六事件・1936＝50歳：	理学部長に就任後も、文部省の思想統制的通達に反発、
日中戦争始・1937＝51歳：	<ノモンハン事件>とドイツ軍の電撃的勝利を端緒に科学ブームが始まる。
健保+総動員1938＝52歳：	初めて“電子工学”“電子工業”の語を用い、その時代が到来することを宣言、
第二次大戦始1939＝53歳：	全国の高等教育機関に出された{学校報国際}設置の通達にも表面的に応じるだけで、運動部統一はせず、学問に関係のないことには極力抵抗して、学生や教官から絶対的な支持を得たが、次第に居づらくなり、
大政翼賛会・1940＝54歳：	長男が結婚で死去。東北帝大の教子で通信省工務局長松前重義の推薦で、東京工業大学学長に就任。日本軍が占領したシンガポールで全く新しい装置を発見、英国人捕虜から“八木アンテナ”と教えられ驚嘆。
日米開戦・・1941＝55歳：	この年、湯川秀樹が文化勲章を受章。科学が戦争の役割を美化するようにものとなって行くなか、 *“八木アンテナ”発明者として支配層から注目され、科学技術行政の最高の地位となる技術院総裁に就任。
・・・・・1942＝56歳：	*天皇に進講、勲一等瑞宝章受章、議会での特攻批判答弁で感銘を与えるも、辞任に追い込まれる。<敗戦>後、GHQに家を撤収されたのをはじめ、一気に窮状に陥る。日本社会党の結成に参加して顧問となり、
創価学会検挙1943＝57歳：	この年、湯川秀樹が文化勲章を受章。科学が戦争の役割を美化するようにものとなって行くなか、
年金+総武装1944＝58歳：	*“八木アンテナ”発明者として支配層から注目され、科学技術行政の最高の地位となる技術院総裁に就任。
敗戦・・・・1945＝59歳：	*天皇に進講、勲一等瑞宝章受章、議会での特攻批判答弁で感銘を与えるも、辞任に追い込まれる。<敗戦>後、GHQに家を撤収されたのをはじめ、一気に窮状に陥る。日本社会党の結成に参加して顧問となり、
新憲法公布・1946＝60歳：	大阪大学学長となるも、教職不適格の指定を受けて辞職すると、政界をめざして政治団体を組織、
極東裁判決・1948＝62歳：	随筆集「蟻の咳払い」を手始めに、一般向け科学書「電氣の話」「電波の話」、
三大事件・・1949＝63歳：	子供向け「理科あそび絵本」など出版して糊口を凌ぐ。この年、湯川秀樹が日本人初のノーベル賞を受賞。
独立回復・・1951＝65歳：	日本学士院会員に推される。
マーダー事件・1952＝66歳：	電波監理委員会の聴聞会での証言で、多チャンネル可能な方式が採用される決定的役割を果たし、日立製作所、日本軽金属の出資を得て{八木アンテナ}設立、社長に就任、日立から有能な女性秘書が派遣され、 補欠でようやく当選した参議院選挙の3度目の挑戦で同行、以後親密となる。“八木アンテナ”はテレビ放送が開始されて以降、現在に至るまでVHFテレビ受像用アンテナとして使用され続ける。
TV放送始・・1953＝67歳：	社会党を離党。東急グループの創設者五島慶太に招かれ、武蔵工業大学学長に就任、 参議院の任期終了後は政界から足を洗う。文化勲章受章。以後、学会等へ出席しなくなる。
55年体制始・1955＝69歳：	妻と別居し、渋谷のアパートで秘書と生活するようになる。
国連加盟・・1956＝70歳：	出資2社の主導権争いに嫌気して{八木アンテナ}社長を退き、以後顧問すら引き受けなかった。前年に五島慶太が死去したため、武蔵工業大学学長も退くが、以後も、五島育英会総長として大学を指導、
インスタントメン1958＝72歳：	四谷のマンションを購入、
安保闘争・・1960＝74歳：	早くから認めていた江崎玲於奈の学士院賞受賞に寄与、
全国総合計画1962＝76歳：	
大学紛争始・1965＝79歳：	
美濃部都知事1967＝81歳：	
石油ショック1973＝87歳：	四谷のマンションで倒れ、
角栄金脈辞任1974＝88歳：	思い出したように東北大学から名誉教授の称号が贈られ、
田中角栄逮捕1976＝90歳：	没した。葬儀委員長は松前重義がつとめた。
松尾博志「電子立国日本を育てた男」、 「没年日本史人物事典」、「目でみる日本人物百科」、	